



2018年秋、紅葉の小川ブナ保護林にて
Photo by Keiko Godo

巻頭●対談

木との距離 画家がみる森、研究者がみる森

画家 日高 理恵子 × 田中 浩 国立研究開発法人 森林研究・整備機構 前理事(研究担当)

見上げる視点で、身体から木の枝、空へと広がる空間への距離を独自の感性で捉え、描きつづけてきた画家の日高理恵子さんと、樹冠のギャップダイナミクスから、長期間にわたって森林の動態を探りつづけてきた森林研究者の田中浩さんに、森の中で語りあって頂きました。

日高●さつき一瞬雨がふったので、木漏れ日と水滴の光が美しいですね。

田中●こは、ぼくらが長年にわたって調査をつづけてきた森なんです。この森の印象はいかがですか？

日高●すばらしい森ですね。私が描くのは自宅の庭や神社などの木が多いのですが、こは、さらに木におおわれる印象です。

田中●日高さんは木を見上げて描きつづけておられますが、そこにこめられた思いをお聞かせ頂いてもいいですか？

日高●そうですね、たとえば、この木……

田中●サワシバという木ですね。

日高●このサワシバの木の枝を通して空を見上げてみると、枝が頭上1メートルくらいのところにあるようにみえたり、もつと遠くにあるようにみえたりもする。枝や葉があることで、木の向こうにある空との関係が測りしれない距離をもつて感じられてきます。私にとっては、枝葉が空間を測るひとつの手がかりになるんです。そこにある「測りしれなさ」を描きたいという思いがあります。

田中●木を描いておられるけれど、じつはその向こうにある空との関係をみるためには、木が必要ということでしょうか？

日高●そうですね。どちらかというと自分にはその空間が捉えきれないということを実感するための手がかりとして木を描いているのかもしれません。

いま自宅の庭の小さな木を描いています。この「測りしれなさ」を描きたいという思いとは矛盾しているようですが、より対象に近



空との距離 XIV (ドローイング)

2017 紙、鉛筆、水彩 69.0 × 69.0cm 個人蔵
©Rieko Hidaka, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

づきたくなり、脚立に座って描いています。脚立に座ったからといって、視点が1メートルも変わるわけではないのですが、その数10センチの差が意外と大きくて、ベンチや庭石などに座って見上げる見え方とはまったく違った見え方になります。

田中 ●寝転がって描いたりも？

日高 ●いえ、寝転んで描くことはしません。木を見上げるときは、顔と空が平行になるくらいに首を曲げるんです。そうすると、頭のほうが上、口のほうが下という感覚はもちろん残っていますが、視野の中では、上とか下という感覚がなくなってきました。こういった通常の「位置関係から自由になれる見え方」が、私にとつての「見上げる」という感覚で、寝転がってしまうと、みている場所はおなじであつても、対象を水平にみているときの感覚とおなじになってしまうんです。絵が、「見上げる」感覚でなくなってしまう。

田中 ●なるほど。見え方が自由じゃなくなる。

日高 ●そうなんです。私にとつては、首を曲げて見上げるということが、上とか下とかのふだんある位置関係に囚われない感じ方を生みだしてくれているように思います。

田中 ●森林の調査でも、空を見上げることがあります。ギャップ*というのですが、木が倒れたりすると、ちょうどその空間がぼっかり空きます。樹冠がふさがった森の中は暗く、その暗い森の中では、新たに樹木の実生が芽生えても枯れてしまう。

森林は、人間にしてみると長い間変化がないようにみえますが、ギャップが空いた場所

では、生命の動きがあります。

そこで研究者は森の動きを調べるために、木を見上げて、木の高さを測ったりギャップがないかを調べて歩くんです。

日高 ●高さは、どうやって測るんですか？

田中 ●計測用の15メートルのポールがあるんです。それで測って15メートル以上、15から10メートル、10から5メートル、5メートル以下のように区分します。ギャップの下ではつぎの世代が育ちはじめています。30年近く前に木が倒れた場所があつて、そこでは、もう樹冠の穴をふさぐように新しい木が育ってきている。

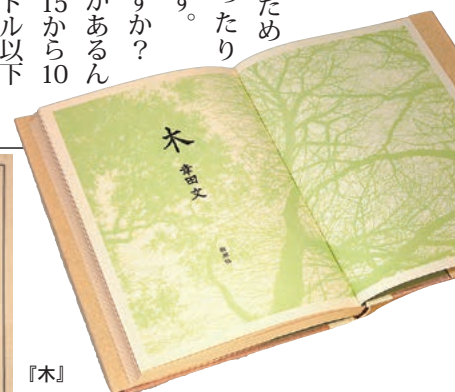
日高 ●幸田文さんの『木』というエッセイ集の中で「倒木更新*」について書かれていたことを思い出しました。エゾマツの倒木更新について知った幸田さんが、北海道の富良野の東大演習林にみに行く話です。

田中 ●木が倒れてギャップができて森の中が明るくなつても、林床にはササがあつて暗かったり、いろんな菌類がいて芽生えを枯らしてしまします。でもエゾマツなどの倒木の上には菌が少なく、ササにおおわれることもないのです。そこではじめて芽生えが、しだいに大きく育つて、場所によると1本の倒れた木の上に並んで生えています。

日高 ●倒木の上にまつすぐに並んで生えるということですね。

田中 ●そういうことです。

森の調査では、木の高さだけでなく太さも測ります。胸の高さで直径を測って、毎年どれくらい成長しているか調べる。また、どのように花を咲かせたり実を着けたりするかも調



『木』

幸田文 著 新潮社

日高さんの絵が扉を飾っている。



*Key Words 林冠ギャップ

森の林冠(葉が集まる森林の上層)をつくる木が台風などで倒れたり、寿命がつきて枯死すると、林冠に穴の空いた場所ができる。これを林冠ギャップという。太陽光が林床に差しこむので、そこでの芽生えや稚樹の生存率が高く、成長も早い。森の木が更新する場として重要。(▶P.11)

*Key Words 倒木更新

トウヒ属などの針葉樹でみられる特殊な世代更新の様式のひとつ。新しい世代が育つとき、腐朽した倒木の上で芽生えたものだけが生きのこるので、倒木の上に稚樹が列をなして成長する。そのため、成木でも1列に並んで育っているようすをみることができる。



日高 理恵子 (ひだか りえこ)

画家。1958年東京都生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻修了。80年代から一貫して樹を題材に、日本画の画材を用いて制作を続ける。国立国際美術館など国内外で個展開催。詩人・長田弘との詩画集『空と樹と』がある。



「絵を描いていなかったら、こんなに長く、木を見上げ、空を見上げつづけていなかったと思います」

巻頭●対談

枝や葉があることで、木の向こうにある空との関係が測りしれない距離をもって感じられてくるのです。

べます。木の高さを調べるときには上を見上げるのですが、花や実をどれくらい着けているかは下から見上げて、まず「みえないなあ」と。

日高 ●あ、みえないですね！

田中 ●葉があると、下からではなかなかみえませんが。葉が落ちると枝の構造がわかるし、いろんなものがみえるけれど、葉が落ちる季節にはもう花や実はない。そういうジレンマがあつて……(笑)

日高 ●おなじ木を、葉がついてないときから描き始めて、どんどん季節が変わっていつ、ここから葉がでてくるんだ、ここから枝が伸びるんだというのをみていると、枝だけの絵と枝から葉がでたときの見え方の両方を描きたくなります。木の見え方が変わるといのは私にとっては同時に、向こうの空の見え方が変わり、そこで生まれる空間が変容していくということなので木の変化は魅力ですね。

何時間も木を見上げつづけていると、空との関係であつたり、太陽や光の関係で一瞬しかみえないものがみえることもあつて、それを独り占めできるのも至福の瞬間です。

田中 ●ぼくらは双眼鏡を使ったり木に登って観察することもあります。長いこと観察をつづけていると、研究データとしてえがきたいものを得られる喜びと同時に、おっしゃるように、この瞬間はぼくしかみていない、そんな森の姿に出会うことがありますね。

日高 ●すごい瞬間をみなさんごらんになってるんじゃないかと想像するんですけど？

田中 ●素朴でかけがえのない瞬間です。紅葉の時期の夕暮れに森の奥で調査を終えて、暗

くなる直前にこの辺りを歩いてくるとコナラの林があるのですが、そこを通り抜けてくる光の感じや、空を見上げての調査で流れていく雲の色合いとか、これは、ぼくしかみてないよなあ……こういうことばかり考えてるから研究が進まないんだよね(笑)

日高 ●いいえ、そういう体験は必ず研究の魅力につながっていくと思います。

田中 ●サイエンスという意味では、現象をみるために木の上のぼつて、どんな昆虫が花粉をとりにつけているのかとか、あるいは遠くから観察して、どんな鳥が種子を運んでいるのかということの中に、常に発見があるわけで、研究自体の喜びはもちろんいっぱいあるわけですけどね。研究は、そんなふうに多様な現象からひとつの結論にフォーカスさせていくのが仕事なんです。

日高さんの場合は、むしろ視点を固定したくないということがあるのでしょか。

日高 ●人間の眼が焦点をあわせてみられる範囲はごくわずかです。大地から幹を立ち上げていく伸び上がり方は木によってちがいますし、さらに幹からつぎつぎに伸びる枝の見え方も、まっすぐに1点透視図法的な見え方ではありません。いま頭上に広がっている世界を見上げて、この空間を平らな画面におきかえようとしたとします。座っている場所は1カ所でも、視点を無数に動かしながら木をみることになるので、自分の視野のなかで、右上から左下に下がっていたと思っていた枝が、ちょっと角度



『日高理恵子作品集
1979-2017』
NOHARA

◎日高理恵子さんの本



◎田中浩さん他編集の本

『森林の生態学』
共著 文一総合出版

田中 浩 (たなか ひろし)

1959年神奈川県生まれ。1981年東京大学文学部西洋史学科、1987年同農学部林学科卒。同年農林水産省林業試験場造林部採用、(独)森林総合研究所森林環境部を経て、対談時は(国研)森林研究・整備機構理事(研究担当)。2019年3月任期満了。現在は、森林総合研究所フェロー。



「研究者になっていなかったら、こんなに長くひとつの森を見つづけ、森の時間に学ぶ幸せに出会うこともなかったと思います」



巻頭●対談

おなじひとつの木をみるのでも、 いろんな視点からそれぞれの研究者がみえています。

を変えてみるだけで、ぎやくになつてしまつたり、そもそもさまざまな角度と高さをもつて立ち上がっているものをどうやって平らな面に描くのかという難問があつて、そういった大きな矛盾はけして描ききれものではないかもしれません。けれども、ここで木をみているという私自身の身体感覚を通してこの矛盾を表現したいという気持ちがあります。

田中 ●研究では、重層的にみえる観察であるとか、客観的なデータから導き出した結果を理論として再構成するので、たぶん観察の視点を変えながらも論文というひとつの平面に再構成するという意味では似たような部分もあるのかもしれないね。

森をみるときにやはり、おなじひとつの木をみるのでも、いろんな視点からそれぞれの研究者がみえている。いままで下から見上げていた花や実の姿と、木にのぼつて目の前で花に虫がきている姿をみるというのは、ぜんぜんちがう姿なので、いままでは見上げることしかできなかったのを、木にのぼつてはじめてわかることがあります。また、飛行機に乗って空から写真を撮るとか、衛星から撮るということで、それらのデータを多角的に分析するということもできるわけです。

日高さんが木を通して空との距離感を絵として定着させるのとはちがつて、たぶんもっとドライな関係かなと思いますが、いろんな方向からみることは、やはり大切ですね。

視点を多くもつことで折々に得がたい経験があつて、それが研究成果とはべつのもちベーションになつていたりもするし、それが

研究のナゾを解く要因になるということもあります。そこが自然を対象としたサイエンスの面白いところかもしれません。

これだけ多様な種類の樹木があつて、多様な生きものがくらす森を研究対象とできるということも大きいのかもしれません。

森のつくりあげる構造のなかにはほんとに多様な世界があつて、そうしたつながりがみえてくると、ますます視野が広がり、いろいろなことを感じるができますね。

日高 ●神社で描いていても、春先になつてくるとえさがなくなつてくるので、コブシの木とかにけつこう鳥がやつてきて、木は鳥のものでもあるので、そのときは、いろいろな鳥との攻防で……鳥が落とし物をしてくる。へたをすると画板に落とし物が直撃するので、「あ、きた」と思つて、一瞬「え、どっち?」どっちに落ちてくるの?」つて。

葉が萌えはじめる春先は、鳥の落とし物も陽ざしを受け、落ちてくるようすを見上げてみると一瞬「美しい!」と思つてしまつたり、落ち葉ももちろんですが、雨も落ちてくるところを見上げてみるとやはりちがう見え方をして。得がたい体験だと思ひます。

田中 ●葉にあたったり、枝を伝つたり、葉からぼとりと落ちてきたり、直接地面に落ちたり、雨にもいろいろなふり方がある。じつは研究者はそういうことも調べてるんです。

日高 ●客観的に分析をされるというのは、大変なお仕事だと思います。私の制作は、すべてが自分自身の知覚体験からはじまつていて、いまでも音であつたりとか、五感がどこか



田中浩さんの本

『カエデ(モミジ)の絵本』
農文協

無意識のうちにいろいろゆさぶられているなかで、眼でみることはもちろんですが、風で空間を感じたり、感覚をゆさぶられる部分があつて、表現をする上ではそれらがとても重要かなと思います。

田中●森の木々の中にとると、音にしても、いまふうつと風が通りぬけたり、遠くで鳥の鳴き声がしたり、ふと気がつく、いつもなにかちがうことが起きているんですね。

日高●気がついたら30年以上も木を見上げて、木と空との関係を描き続けてきました。木を見上げる視点や画材はまったく変わらないの



樹を見上げて VI 1992 麻紙、岩絵具 水戸芸術館所蔵
220.0 × 360.0cm ©Rieko Hidaka, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

ですが、30年以上の時間の中で、空間の捉え方であつたり、絵に対する考えなどが少しずつ変化してきていて、私自身のその時点時点での捉え方や考え方が絵に残されていくのかなど。もちろん1作1作が独立した作品ですが、絵に残る私自身の思考や感じ方の変遷そのものが、ひとつの表現になっていったらと思うようになりました。そしてこれは対象が木であつたからこそ、ここまでつづけられたということは絶対にあると思うんです。木そのものが私にとって魅力的だから、つづいたのでしよう。木の構造や、その向こうの空が一緒になつて、絵を描く上でのインスピレーションや想像力を広げつづけてくれています。

冬の枝だけの姿から葉がしだいに現れてくる、そうした瞬間、時間を共有していくと、ゆつくりとした時間の流れのなかで、変わらないようにみえる木がやはりその時々を生きて、変化していく姿がみえてくるように思うんですね。

以前、詩人の長田弘さんと、『空と樹と』という詩画集をつくらせて頂いたんですが、長田さんの詩の言葉にとっても重なる感覚を感じて、木が持っている存在の強さというのは、やはり、本当にすごいなあと感じています。

田中●うれしいです。ぼくも樹木にそうした想いをもって接しています。たぶんそうした樹木から触発される共通感覚のようなものが日高さんの絵にあつて、それで絵に魅かれるのだと思います。

日高●ありがとうございます。

田中●木ももちろんですが、森もじつは動か

ないようにみえて、長期間みつづけていると大きな動きをみせています。森の動態を調査するということは、そうした動きを感じる仕事でもあります。

日高さんは、これからも木を見上げて絵を描かれていくのでしょうか？

日高●たぶんこれからも、木を見上げて描きつづけていくのだらうと思います。歳を重ねるということは当然衰えていく部分がある、身体的な変化もあり、感覚も衰えていく部分があるかもしれませんが、でも、それは考え方を変えてみると、いまみえている見え方とはちがう感じ方ができるということじゃないかとも思うんです。自分自身が10年後20年後になにをみて、どう感じ、どう描きたいと思うかを、私自身みてみたいと思っています。

田中●日高さんのお話しは、まさに森の中でうかがうのに、ぴったりのテーマでしたね。

日高●この森でお話しできたことで、これから木を見上げるときの何かべつつの視点をみつけたような気がします。森にいるのは大好きで、とてもいい体験をさせて頂きました。



『空と樹と』の
本 日高理恵子

『空と樹と』
長田 弘・詩 日高理恵子・画
エクリ